
THE ACT FOR.....

空創サリヲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE ACT FOR

【Nコード】

N 8 1 9 6 X

【作者名】

空創サリヲ

【あらすじ】

魔術、武技、科学技術の三技術が重視される世界。

そんな世界で、魔術と武技に力を入れる学校『第一魔術武技専攻高校』に入学することになった主人公キリヤ。

入学早々生徒会長に気に入られたり風紀委員副会長に目の敵にされたりと波乱万丈なスタートとなる。

そんな中、キリヤは何の為、誰の為に行動するのか……？

ため息は幸福を逃がす（前書き）

この作品は近未来ではなく近似世界なので語句の意味が多少違う場合があります。

ため息は幸福を逃がす

「う、ふあああ……」

大きな欠伸を一つする。

藍色のカーテンの隙間から薄く光が漏れている。

壁際の座椅子に脱いだ服が少し重なっているのを除けば、かなり整頓された部屋。

その男子学生の部屋にしては綺麗なこの部屋の主は、上半身だけを伸ばして目覚ましを取る。

時刻は6時28分。

「三十分も早く起きたのか……」

独り言を呟きながらベットから抜け出す。

——別に気負ってたつもりはないんだけどなあ。案外緊張してたのかね。

遠足前の小学生のように時間前に起きた自分を、少し意外に思いながらカーテンを開ける。

同時にまだ少し寒さを残した日差しが部屋を照らす。

その窓の正面のクローゼットを開け、着なれた黒い学制服——ではなく真新しい制服を手取る。

白いワイシャツの上に黒基調に黄色いラインが縁どるように走るブレザーを着る。

ズボンはグレーと白のチェックのスラックス。

最後にやや暗い色の青いネクタイを締める。

それが、今日から九瀧^{くたう}キリヤが通う学校の制服だ。

三十分という二度寝には短く何もしないには長い時間を、キリヤは何もせず過ごした。

それは、あくまで他人には何もしていないように見えるだけだったが。

正座したまま目を閉じ自分の内に意識を集中する。
自分の気の流れを意識し、それを操る。

それによって自分のコンディションを最高に近いものに高める。
なにせこれから通う学校は何があるかわからない。用心して損はないだろう。

そうして瞑想しているキリヤの耳に、騒がしい音が届いた。

「……ふう」

張っていた気を緩めた拍子に息が漏れる。

もっとも、別の意味がこもったため息でもあったが。

キリヤが目を開くと同時に、自室のドアが勢い良く開け放たれる。

「キーリヤっ！ 起きろー……ってあれ？ 起きてた？」

「……はあ」

今度こそ純度100のため息が漏れる。

無遠慮に部屋に入ってきたのは、明るい栗色の髪をショートに揃えた少女だ。

大きめでややツリ目の瞳は猫を思わせる。他の要素（主に性格）が合わりシyamよりスコティッシュといった方が似合っているが。

「それよりも……」

部屋に無遠慮に入ってきたことよりも、もっと気になることがあった。

「なんでお前……前の制服着てるんだ？」

「……えっ？」

キリヤに指摘され、スコティッシュ少女、立花リツカは自分の姿をあらためる。

視線の先の服装は紺のセーラー服。

今度はキリヤの服を見る。こちらは黒基調のブレザーとグレーのストラックス。

男女で制服の細部は違えど、ここまで違うことはない。

通う学校が違えば話は別だが、通う学校はキリヤもリツカも同じだ。

「あ、制服間違えた……」

「だからそう言ってる。……まだ余裕あるから着替えてこい」

言い終わる前にリツカは部屋を飛び出しドタドタと階段を騒がしく降りていく。

「まったく、どこまでステレオタイプなんだあいつは……」

本日三度目のため息。ああ、幸せが逃げていく。

ある意味それは、正しい感想だった。

これからのことを考えれば、やはりため息がでる。

——平穩無事に、行きたいもんだな。

そんなことを考えながら、キリヤも部屋を後にした。

持つべきものは幼馴染み

一階に降りてぼーっとテレビを見てみると、インターフォンが鳴った。

——— こんな時間に来る知り合いなんて居たか？

疑問に思いながら玄関に向かう。

ドアを開けた先にいたのは、黒基調のブレザーと茶色と白のチェックのスカート、こちらはネクタイではなくリボンに身を包んだリツ力であった。

「……なんでわざわざインターフォン？」

「……………別にいいでしょ」

——— 今更そんな遠慮する中でもないだろうに。つか今日の朝勝手に入ってきてたし。

実際、たとえ鍵が掛かっていたとしても、リツカはスペアキーを持っているので入れるはずだ。

別に、二人が付き合っている。というわけではない。

二人はいわゆる幼馴染みだ。

二人が生まれる前からお互いの両親が仲が良かった。

キリヤとリツカの家はかなり離れてるが、交友が途切れることはなかった。

故に必然と仲が良くなり、今では朝迎えに来てもらえる仲にまでなったというわけだ。

「……………どう？」

唐突に、リツカが上目遣いで尋ねてくる。

しばし考えて、無難と思われる回答をする。

「髪、少しはねてるぞ」

「えっ、嘘……てちつがーう！」

急いで頭を抑えて、すぐに両手を上に突き上げる。

どうやら怒りを表現しているらしい。

「冗談だ。結構似合ってるよ、制服」

「むう、なんでそれを最初に言わないかなあ」

文句を垂れつつも、満足げに微笑んだ。

さらにその笑みをニッコリに進化させると、ずい、とバスケットを突き出した。

……どこに持ってたんだそれ。

「なんだこれ？」

「ん？ 朝ごはん。パパが今日はめでたいからな！ って言って奮発してくれた」

「……いつもありがてえ」

リツカの父さんはプロの料理人だ。

なんでもミシュランで星三つ貰ったとかなんとか。

「ま、これも幼馴染みの務めですよ」

エヘンと胸を張る。なんでリツカが偉そうなんだ。

こうやってリツカの家がキリヤにご飯を作ってくれるのはいつものことだ。

現在一人暮らしのキリヤが、普段は食事は適当に済ますという発言から始まったことだ。

リツカ父がそんなのは許さん！ と説教を始めた拳句

『俺が毎日作ってる！ 飯は命の源だ。おろそかにするのは許さん！』

ということとで毎日プロの食事にありついているわけなのだ。

「とにかくあがれよ。飲みもん用意すつから」

言って台所に向かう。

キリヤがコーヒーと紅茶を用意する間に、リツカはテーブルに料理を広げる。

今回はサンドイッチだった。

奮発した、という割にはシンプルな料理だ。

と思ったのは一瞬だけだった。

よく見ればサンドされているのは国産ビーフや瑞々しい野菜たち。

どうやら今回は材料を奮発したらしい。

「ほい。お前は紅茶だろ？」

「あ、ありがとう」

リツカに紅茶を渡し、席に着く。

「いただきます」

言うが早いか二人は我先にとサンドイッチを頬張った。

魔術の概念（前書き）

この回は魔術の設定書きと化しています。ご注意ください。

魔術の概念

食事の後、バスケットを家に置いてくるというリツカに、キリヤも同行した。

当然サンドイッチのお礼を言つたためだ。

「ただいまー」

「お邪魔します」

勢い良くリツカが家の扉を開く。

すぐにパタパタとスリッパの足音。

「おかえり。キリヤ君も、いらっしゃい」

リツカの母親、立花シズネさんが二人を迎えた。
見るものを癒す微笑みに、キリヤは頭を下げる。

「どもつす。……ライゴさんいますか？」

ライゴ、とはリツカの父の名前だ。

シズネさんは首を横に振ってそれに答えた。

「もう仕事場に言っちゃったわ。『最後に娘の制服姿が見れて俺あ
幸せだア！』って叫んで」

ふふふ、と上品に笑う。

「相変わらず豪快な人ですね」

キリヤも思わず苦笑する。

リツカは少し恥ずかしそうにしている。

「そ、それより！ はい、バスケット。もう行かなきゃ時間なくな
っちゃう」

「あ、そうだな。それじゃライゴさんにサンドイッチありがとうご
ざいましたって言つといてください」

「はい。リツカ、キリヤ君。行ってらっしゃい。」

シズネさんが手を小さくふって送り出してくれる。

「いってきまーす！」

異口同音にキリヤとリツカが叫ぶ。

特に意味なく走り出す。
爽やかな、初登校には悪くない朝だった。

キリヤが入学する学校の名は『第一魔術武技専攻高校』。

読んで字のごとく、魔術と武技を専攻する学校だ。

今の世界は魔術、武技、科学技術の優秀者が世界を支えていると言
っても過言ではない。

魔術はいわゆる超能力のようなものだ。

遙か昔に確立された技術らしいが、正確には分かっていない。

ただ、その性質は解明された。

大きくいえば、魔術とは万物を創造、破壊、変革することである。

生命、物質問わず万物に宿る基礎物質^{エレメント}粒子を書き換え、組み換え、
削除することあらゆる事象を操作する。

当然制約もある。

自身のエレメント量を超える事象変化は起こせないし、他の生物の
エレメントにも“基本的には”干渉できない。

さらに、ともにエレメントに干渉しては術者が持たない。

基本は自分のエレメントと引き換えに対象のエレメントに等価の事
象変化を起こす。

実際昔の魔術師はそうしてきたらしい。

だが、自分のエレメントを失いすぎると命の危険がある。

それによって死んだ魔術師も多い。

そんな中、火を放ち、雷を繰り、風を起こす魔術師が現れた。

今までは物の形状変化や物体を壊す、または創り出すのが魔術だっ
た。

しかし、その魔術師たちの術こそ真の魔術だと感じた人々が研究し、
発見したのが概念的思念^{イデアシオン}粒子だ。

イデアシオンはわずかなエレメントをパイプとして世界に様々な影

響を起こす。

現在の魔法はこのイデアシオンをエレメントで操り、魔術陣や魔術式によって魔術を発動するのが主流となっている。

第一魔術武技専攻高校（通称第一もしくは第一魔技専）では、このエレメントによるイデアシオンの操作による高度な魔術を学ぶことが出来る。

より詳しく言えば第一、第二、第三が高度な魔術。

第四以降の第八までは警察で言えばノンキャリア、つまり一般人よりは使える程度の魔術師育成しかない。

その上第一は筆記もそれなりに評価対象になるので、実質エリート高校中のエリート高校と言っても過言ではないだろう。

その、魔術師育成校の頂点である第一魔術武技専攻高校の厳かな校門を、キリヤとリツカは堂々と、誇らしげに通り抜けていった。

一難去ってまた一難

校門から正面玄関までの石畳の道が、今は真新しい制服の生徒でこつた返していた。

「これは……スゴイな。500人くらい居るんじゃないか？」

「それだけの生徒が入り切るのもすごいよね……」

意気揚々と校舎に足を踏み入れたキリヤとリツカだったが、その壮大さにあっさり気圧されていた。

そもそも正面玄関までの道が200メートルはあろうかという長さだ。

さらに脇道は自然豊かなパブリックスペースになっている。

校舎も校舎で真つ白な壁に金の装飾、中央上には鷹を象った赤と黒のアイコンと、宮殿のような豪華な構えになっている。

集まっている生徒も、筋骨隆々の大男や、知的な痩身の男。華やかな西洋系の少女に健康的な日焼けの格闘少女ナドナド。

とにかく十人十色どころではない、個性豊かな新入生ばかりだ。

その上、この第一に通うということはかなりの実力者ばかりだろう。

「とにかく、校舎に入るか。ここは逆に落ち着けないし」

キリヤが歩き出す。

ひと足遅くリツカも慌てて人波を避けつつ、キリヤの後について行った。

まるで祭りのような特殊な空気と高揚感で舞い上がった生徒たちを避けて歩くのは意外に骨だった。

リツカなどは肩で息をしている。

——　　「つたく、なんで毎日通るところでお祭り騒ぎできるんだ。

やや冷めたことを考えながらリツカを見やると、物惜しそうにお祭

り状態の生徒たちを見ていた。

お前もか！　とは思いつつ、角を取った声音で諭す。

「どうせ毎日通るんだ。今日じゃなくてもいいだろ？」

「あ、あのお祭りっぽい空気がいいんだよう！」

「俺はやダ」

あえて子供っぽく言い切る。

リツカは小さな子供のようになすげなく断られ、シュンとしてしまった。

小動物のようなその動きに、何となく頭を撫でる。

逃がさないようにしながら休める場所はないかと辺りを見回す。

第一の玄関スペースは外見に違わ^{たが}ず広かった。

天井も十メートルは下らない高さにある。

下手な学校の講堂よりも広いかもしれない。

と、キリヤの視線が止まる。

「ねえ、キリヤ……あれって？」

「ああ、たぶん、厄介事じゃ、無いといいなあ」

講堂の奥に、恐らく二十名以上の人が出て来た。

何となく不穏な空気にウンザリしながら、仕方なく歩いていく。

別に野次馬根性を出したわけではない。

これはもはや呪いの如き誓約なのだ。

リツカも嫌な予感しかないながらも、しっかりとキリヤの後に続いて人垣に向かっていった。

嫌な予感は、やはり当たっていた。

「二年だからってチョーシこいてんじゃネエぞ！！」

男の野太い怒号にリツカが身を竦^{すく}める。

「フン。五月蠅^{ひめつ}いことだな。もっとも、いいのは威勢だけだろうがな」

知的な空気をまとった声が挑発する。

ここからでは人垣が邪魔で見えないが、どうやら武闘派な新生が
気取った二年生に食ってかかっているようだ。

二年生も挑発していることから一概には言えないが。

「はい、ちよつとしつれーい」

リツカと共に人垣を掻き分けて騒ぎの中心を見やる。

そこには、予想通りの光景が広がっていた。

今にも噴火しそうなほどに顔を憤怒ふんぬに赤くした体格のいい男が、メガネをかけた知的な優男風の上級生に詰め寄っている、と言う光景が。

詰め寄る男は、身長は190オーバーくらい。肩幅も広く、制服の上からでも引き締まった筋肉をしていることが見て取れる。

そんな、自分よりも一回り近くも大きな男に迫られても、知的な男はまったく焦りを見せない。

いつそ余裕、油断すら見える男に、キリヤは不安を覚える。

あの手の人間は自分が常識であり、その尺度を超える行動を他人が
することを考えないようなタイプだ。

あの距離で攻撃されても対応できる。という実力者ならいいが、こんなところで校則違反の不正戦闘行為などするはずがないとタ力を括っているなら、それは間違いだ。

あの大男のようなタイプは校則よりも自分の感性で動く。

あくまで一般論的人間観察だが、キリヤに至ってはもはやプロ級の観察眼を持っている。

「き、キリヤ……！ 止めようよ！」

「ああ、流石にヤバ目だしな……。でもま、お前はそこにいろよ？」
リツカが首を縦に振るのを確認してから、キリヤは野次馬たちの輪から一步前に出た。

「おい」

高く、透き通った声がキリヤの声と被った。

その場の全員の視線が透き通った声の主へ集まった。当然キリヤもその例にもれない。

大勢の視線を堂々と受け止めながら、一人の女子（女性、の方が適正な気もする）が歩み出てきた。

肩甲骨まで伸びた、髪質の柔らかなような美しいブロンド。

顔立ちはまるで人形のように整っている。そのサファイアブルーの瞳には、自信とプライドの色が見て取れた。

まさにパーフェクトに綺麗な西洋系の美人だ。

しかし、キリヤの視線はすぐに整った顔から右腕の腕章へ向かった。そのワッペンが黒地に白文字で“副会長”と書かれている。

記憶が正しければ、この第一魔技専では白地に黒文字の腕章が生徒会役員。黒に白字が風紀委員の証だったはずだ。

——風紀委員殿が出てきたなら俺の出番はないな。

出番が取られた。と拗ねるほど子供ではないし、何より不要に目立つのはむしろ嫌いなので、キリヤはこのまま傍観者と化すことに決めた。

「お前たち、わかってているのか？　ここでことを起こせば不正戦闘行為として校則違反となるぞ？」

女生徒の声に、二年の男は当然とばかりに一步引いた。のだが……

「るっせエ！　女が口出してくんじゃネエ！　なんならお前からやつちまうぞゴラ！」

あっちゃー……

思わずキリヤは顔を顰める。

今の言葉は、あの西洋系の風紀委員には禁句クラスの暴言だったはずだ。

それが、東洋系の野郎の言葉なら尚更、だ。

予想を裏切らず、女生徒の纏う空気が一変する。

それは、明らかな怒気と明確な殺気のこもったオーラだった。
危険を感じたのか、もう一人の当事者である二年生は、いつの間
か人垣の中に消えていた。

二度あることは二度ある（前書き）

時々魔術を魔法と表現していますが、魔術と魔法は同義です。

二度あることは三度ある

東西で国が分かれていたのは、既に200年近く前のことだ。

しかし、今もその差別意識に似たイデオロギーは払拭しきれずにいる。

東洋は武技に秀でた平和な国だった。

和を愛する非好戦的な国柄で、しかし戦の強さは西洋を圧すほどだった。

他の小国からは武力平和国家と（多少の揶揄も込めて）呼ばれていた。

そんな国柄、実質的に敵対している西洋とも和平を！ と様々な行動を起こした。

だが、西洋はそれを全て拒絶、もしくは無視した。

最初こそ穏やかな民衆性により、敵対国だし仕方がないと考えられていた。

しかし、あまりに頑なな西洋の対応にさすがの東洋も我慢の限界が近づいていた。

そして、十数回目の和平交渉会議で西洋の代表の放った言葉によりついに東西の分断が決定的になってしまった。

曰く、

「貴様ら東洋のサル共が我ら高貴な人間様に和平など烏滸がましいにも程がある」

だった。

こんなことを言われて耐えられるほど、東洋人たちは人間が腐っていないかった。

このセリフは、西洋が東洋との対立を明確にするためにあえて放った言葉だったらしいが、真偽の程はわからない。

とにかく、ここで完全な東西戦争が勃発。

周辺の小国家を吸収しながら約500年間の戦いの末、ようやく同じ国に東西の区別なく済むようにまではなったが、やはり未だ対立意識は絶えない。

西洋の家柄のいい人間などは、特に。

このような時代背景故に、今回の大男の発言は完全に爆弾発言だった。

見たとこ副会長殿は純血の西洋系、男は多少混じり気はあれど完全な東洋系だ。

特徴として西洋は色白、瞳が澄んだ寒色系。

東洋は日焼け時に黒くなる（西洋は赤くなるだけ）、髪が黒などの無彩色が多いなど。

純血に近ければ近いほどこの特徴が出やすい。

「ンだア？ ヤンのか思い上がりの病人モドキがよオ！」

男が一步大きく踏み出す。

そのまま上から睨みつける。

副会長も鋭い眼光で下から睨み上げる。

「薄汚いサルに分際で私に楯突く意味を教えてあげるわッ」

その言葉を合図に、二人がバックステップで距離を取る。どうしてもいいが、両者とも差別蔑称全開である。（西洋系は色白のため病人の類語、東洋系はサル）

着地と同時に男が自身の右手を何も無い背に持つていく。

あたかもそこに剣の柄^{つか}が在るかのよう。

——あれがあいつのSIMトリガーか。

SIMトリガー、正式名は簡易略式型魔術（Simple infantry magic）トリガー。

近年の魔術の代表的な技術の一つである。

理屈と方法は簡単だが、簡易の名には相応しくない程度に習得が難しい。

端的に言えば、ある動作と魔術の発動を一对の行為として、その動作一つで魔法を発動する技術、ということになる。

例えば、腕を交差させ突き出す動作と、火球を打ち出す魔法をセットとしたいとき、その腕を交差、突き出すという動作（トリガー）をしたあと、火球を打ち出す魔法を発動させる。

それを徐々に動作、発動の感覚を短くしていき、最後に強力なイマジネーションによって動作を行うと勝手にエレメントが動き、イデアシオンを操作、魔法を発動させられるようになる。

ちなみに、現在人間がストックできるSIMトリガー数は15と言われている。

脳の処理能力の問題らしいが、実際は5個もストックがあればかなり戦闘が有利になるために特に不便に感じることは無い。

つまり、この男もただのビックマウスでは無いということだ。

ちようど、剣を背負っていれば柄がある空を掴むと、魔術陣が男の手元に浮かび上がる。

その魔術陣から、一本の分厚い大剣を一気に引き抜いた。

暗い紺の金属、恐らくクロニカ鋼に沿うように刃の付いた片刃の大剣。

斬撃部分は大きく波のようになっている。

恐らく攻防一体型の武器だ。

「つう……うオラああああ!!」

引き抜くと同時に肩に担いだ大剣に、上体をひねった勢いを乗せて一気に駆け出す。

その大きな体格を考えれば相当速い動きに、キリヤは目を見張った。あの間合いではもう女生徒はバックステップが間に合わない。横は言わずもがな。

前に出たところであのダンプのような突進に吹っ飛ばされる。

まさに万事休す、絶体絶命のはずだが、彼女からは自信も余裕も消えない。

スッ、と副会長が人差しを立てた左手を体の前に持ってくる。

それを空気を裂くように垂直に下ろす。

同時に足、踝くるぶしのあたりに空色の小さな魔術陣が。

「……ハッ！」

ク、と少し膝に力を溜めると、気合と共に地面を蹴る。

「なッ!？」

驚愕に声が漏れる。

副会長は、後ろでも横でも前でもなく、上に“飛んだ”。

もちろん実際は跳躍なので“跳んだ”が正しい。

しかし、その優雅で華麗な“跳躍”は、“飛翔”と呼ぶのが正しいように思えてくる。

それほどすごかったのだ。

何より、魔術でブーストしているとはいえ“5メートル”もの大ジャンプに、皆呆然としていた。

それ自体は珍しいことではない。

しかし、あの程度の、軽い筋肉バネの運動でこれほど跳べる者など、そうはいない。

ただ、猛烈にどうでもいいことだが、あんなに高くジャンプしては下着が見えるのでは、というのは下世話と言うものだろうか。

恐らく三秒以上の滞空を終えて、スタッ、と音がしそうなほどキレイに着地した（その間スカートは重力と空気抵抗に逆らう快拳を成し遂げた）。

余韻で静まったあたりにチャリンつと金属の音が響いた。いつの間にか右手に細長い金色の棒状の物をもった副会長が、人差し指を立てた左手を体と平行に構えて、左に振った。

今度は赤い魔術式が右手に浮かぶ。

その右手を大きく引き絞りながら、ブーストされたままの足で地面を蹴る。

今度は弾丸のように水平に翔んでいきながらさらにもう一度地面を蹴る。

男も咄嗟に大剣を体の前に構え、クロニカ鋼部分を叩く。

それがトリガーになり茶色い魔術陣。恐らく硬化魔法。

そして、二つの武器がぶつかりあった刹那。

とても細い金属棒（恐らくレイピアかエストックの類）では出せないようなドゴオンという音が鳴り響いた。

正確には、金属棒で砕かれた大剣から、だが。

「……マジかよ」

キリヤが呟く。

その威力もさることながら、あれほどの高位魔術を指を振るだけの単純なトリガーで行なったことに、キリヤは驚愕を隠せずにいた。大剣使いの男は、完全に茫然自失で地面にへこたれている。

一度鼻を鳴らしその場を去ろうとした副会長殿の目が、キリヤを捉えた。

「なんだ貴様は？ お前もこいつの仲間か？」

「へっ？ いや、俺は……」

確かに、他の野次馬よりも一歩前にいるキリヤは、考えようによってはそうも見えるかもしれない。

何より、名前こそらしくないが、キリヤはかなり純血寄りの東洋系だ。

在らぬ疑いを晴らそうと弁解を始めたキリヤの言葉を、大剣使いが遮った。

「や、やめとけッ！ こいつ、まじでヤベエぞ！」

「ちょ！？」

何余計なこと言っただ！？

今のは、大剣使いの優しさなのだろう。

いきがっている西洋系に一発わからせてやる。と意気込むヤツに見えたのかもしれない。

だが、この場合はありがた大迷惑だった。

冷静さを取り戻しかけていた副会長の目が、またも冷たい色になる。あの超威力の威力ブースト魔法は切れているが、足の強化はそのまま。

一步相手が動いた瞬間、キリヤは自分の斜めがけバックを投げ捨てると同時にある“モノ”を出した。

それは、脇差と呼ぶにも短い短刀、強いて分類するなら“ドス”が一番近い。

武器を出したことで、相手は完全にこちらを敵とみなしたようだ。

一気に距離を詰め、金属棒の突きを放ってくる。

「くっ!？」

ギリギリ短刀で軌道をずらす。

しかし、そこで安心はできなかった。

「ス、ハア！」

ブーストされた足による、跳躍力を威力に変換したハイキックを、辛うじて右腕でガードする。

その衝撃を逆に利用して後方に跳び、距離をとる。

副会長もすぐには追って来ず、左手を水平に構える。

先ほど大剣を破壊したあの技だ。

——技の出を撃つ！

未だしびれて動かせない右手をぶらりと下げたまま、短刀を体の正中線に合わせる。

もはやキリヤには、周囲のざわめきは聞こえてこない。

ただ目の前の敵の一挙一動に気を配る。

相手の左手が動き出すと同時に駆け出そうとした瞬間。

「そこまで！」

鋭い一言に、思わず足を止める。

それは相手も同じだったらしい。

手を中途半端に止め、声のした方を見ている。

そこに居た人物に、キリヤは今日一番の衝撃を覚えた。

そこに居たのは、第一魔術武技専攻高校の生徒会副会長と会長その人だった。

君主危うきを望む

第一の生徒会長を知らないものは、魔技専系の高校に通うものには居ないとすら言われている。

その手の話題に疎いキリヤでも、顔と名前以外の情報も把握しているほどだ。

名は確か天ノ女^{あまのめ}レイナ。

古代から続く陰陽や巫女、神主などを多く出してきた神道系の由緒正しき東洋系豪族、天ノ女家の長女にして才女。

その実力は現当主、天ノ女重原^{じゅうげんどう}桐を超えると言われている。

当然得意な魔術の系統は神術や祈祷術、陰陽術に古天陣（古式の魔術陣による自然操作魔法）などの古代魔術だ。

しかし、普通の攻撃魔法に始まり回復魔法から果ては大規模殲滅^{せんめつ}魔法までなんでもアリなまさに天才と呼ぶに相応しい存在である。

その上、容姿は十人いれば十人が美人と評するだろう。

純血東洋系にもかかわらず陶器のような真っ白い肌。

腰まである艶やかなピアノブラックの髪。

くつきりとした二重の瞳は優しさと強さを感じさせる光を放っている。

プロポーションもモデルで通りそうなスタイルとまさに完璧な女子いや、もはや女性が正しいか。

身長174cmのキリヤよりも目線が高いので、女生徒の中でもかなりの高身長だろう。

何より、オーラが凄い。

特に何をしているでもないが、思わず気圧されるような気さえしてくる。

確認するまでもないが、右腕には白地に黒文字で『会長』の腕章。

「アニエス副会長、まずはその“武器”を仕舞っていただけますか？」

丁寧な、それでいて攻撃的な声音で促したのは、天ノ女会長……ではなく、その隣に佇む少女だった。

こちら、会長ほどではないがかなり整った顔立ちをしている。焦げ茶色の短すぎない短髪の似合う、よくいえば勝気な猫っぽい目をしている。

同じ猫っぽいでも、リツカは小動物的な愛らしい系だとすれば、この少女は活発でやんちゃなボーイッシュ系か。

そのやんちゃそうな目を今は睨むように薄めて、自分がアニエス副会長と呼んだ風紀委員のことを見ている。

今更だが、腕章からしてこの少女が生徒会副会長なのだろう。

「なぜですか？ 夏目副会長。彼はその野蛮なサルの仲間なのですよ？ 見てのとおり武器による反撃も試みていましたし」

アニエスの言葉に、キリヤはギョツとする。

先に武器で攻撃してきたのはアニエスであり、たとえキリヤが反撃したとして一切文句を言われるいわれはないのだが、キリヤが焦ったのはそのことではない。

目の前には東洋系の代表格である天ノ女家の長女がいるのだ。

その目の前で堂々と蔑称を使ったことに驚いた。

冷静な口調だが、内心は相当興奮しているのかもしれない。

その言葉に、夏目というらしい少女が食いつく。

「あなたね！ もう少し冷静になりなさい！ 状況がキチンと把握できないほど落ちぶれてはいないでしょう？」

もつともな怒りだが、今の言葉にはアニエスが蔑称を使ったことよりも、キリヤが悪人扱いされた事に対する怒りの方が大きかった気がする。

特に根拠はないが。

怒り心頭で睨む夏目と、内に怒りを宿しながら冷めた態度で睨み返すアニエス。

そのまま戦争を始めそうな二人の間に入ったのは、今まで傍観していた天ノ女会長だった。

「二人とも、少し落ち着きなさい。それから、新入生の諸君。特にその君」

目線から、キリヤのことだと思われる。

自分を指差し確認すると、頷く動作が返ってきた。

「入学早々とんだデモンストレーションになっちゃったが、これで理解できたと思う。」

この学校では、違法者には容赦ない制裁が待っているし、納得のできないことがあれば力で無理やり通すこともある。……もともと、

違法戦闘行為ではなく決闘と言う形で、だがな」

よく通る澄んだ声で、天ノ女会長が語りだす。しかし今のデモンストレーション扱いか。

「特にわが校の風紀委員は腕っ節が強いのでな、死にたくなければ無茶はしないことだ。さあ、もうすぐ入学式が始まる、遅れんようにな」

会長の言葉で、野次馬が三々五々に散る。

これ幸いとバックを回収し、リツカと共に退散しようとした。……のだが。

「ああ、その一年。君だ、アニエス副会長と一戦交えた君！」

「……なんでしょうか」

大声で呼び止められ、渋々応じる。……イヤイヤ感を全面に出して何となくといった感じにリツカも付いてくるが、会長は何も言わない。

「さつきは大変だったな。……えー、名前は？」

「キリヤ、九瀧キリヤです」

「くたつ？ ……変わった名字だね」

——あなたには言われたくない。

とは思っただけで言わない。

この人なら笑って済ましてくれそうだが、夏目という副会長に睨まれそうだった。

「さて、まずはアニエス副会長。彼に謝ってもらおうか？」

「なッ！？ 何故私が……！」

アニエスが絶句する。

「当然だろう？ 彼は君に刃向かうつもりでいたわけじゃないんだからね」

まるで、全て理解しているような口調である。

しかし、アニエスはその言葉に素直に納得などしない。

そもそもあの大剣使いの一言で斬りかかって来たのだ。そんなことを言われてそうでしたか。とはならないだろう。

だが、どうやら会長は本当に全て解っているようだった。

「彼は君と同じタイミングで彼ら、最初に喧嘩していた二人のもとに歩いて行っていたのだよ。……アニエス副会長のインパクトで気付かれていなかったがね」

後半は苦笑しながらの言葉となった。

「あの、天ノ女会長は最初から見ていたんですか？」

リツカが恐る恐る尋ねる。

「ああ。君の彼氏はかなりの武技の腕のようだね」

あっけらかんと、というかさらりと天ノ女が爆弾発言を言い放つ。

「ちッ！？ 違います！！ そんなんじゃないですよ？！」

面白いほどリツカはうるたえる。キリヤは内心でため息をつく。この人は後輩イジリが好きなようだ。

少し遅れてアニエスも反応する。最初から見ていた、という部分に

「だったら何故はじめに止めなかったのですか。……私がこの新入生へ謝罪する姿が見たかった、なんてことはないですよね」

敵意に満ちた目で睨まれても、天ノ女会長は動じなかった。

むしろ楽しんでいる感すらある。

案の定会長は心底楽しそうに笑って

「まさか！ そこまで悪い趣味はしてないよ。ただ、九瀧君の体捌たいさはきに見惚はれていただけさ」
などと嘯はなく。

あまりに堂々とした誤魔化しに、アニエスも毒気を抜かれたようだ。

——この人とだけは敵対したくないな。

元々敵を作る気などないが、それでも思わずそう考えてしまうキリヤだった。

「……会長。そろそろ講堂に行きませんと」

夏目に促され、洪々と天ノ女会長も後輩イジリを終え、真面目な顔になる。

「まあ、君のような人間は心配ないと思うがな、ここでは術のある者や技に長けた者は自然と羨望を集め嫉妬を買うからな。……気を付けたまえよ？」

最後は、かなり真剣みのある声音での忠告に聞こえた。

イマイチ対応に困り曖昧に頷いておく。

そのまま去っていく会長の後ろ姿を見送る。

——会長の態度。なんか無理してるように見えたのは……気のせい、だよな。てか俺がこんなこと考えるのはおかしい、か。

やや卑屈なことを考えるのはキリヤの癖のようなもの。

改めてキリヤとリツカは、講堂へ向かうことにした。

西洋美形の会長

講堂での教師紹介、代表挨拶などが済むと、新入生は各クラスへ移動する。

講堂入口に待機していた教師にクラスプレートを渡される。

ナンバーは？。つまりG組だ。

第一のクラス制度は、得意魔術の種類や傾向、武技の得手不得手で決まる。

？がS組、？がA……。と続いて？まであり、Sに近ければ魔術特化、Iに近ければ武技特化になる。

キリヤのクラス、Gクラスは武技能力の高い、自己強化系魔法が得意なグループのクラス。

「ええーキリヤG組い？ 結構離れてるなあ……」

「お前は何組だよ？ Cか？」

キリヤの手元を覗き込みながらリツカが唇を尖らす。

いちいち仕草がわざとらしいが、リツカはこれが普通なのだ。

「んーとね、私はAだったよ！」

Aと言えば攻守回復魔法が単体、範囲問わず好成績者で無ければならないクラスだ。

「お前そんなオールマイティだったっけ？」

思わず問いかける。

リツカもかなりの腕なのは知っているが、実はあまり詳しくないのが実情だった。

せいぜいB（攻守魔法が単体、範囲共に得意）くらいだと思っていた。

「へへーん。てかキリヤこそなんでG？ てつきりえすんぐツ！？」

……んん？！

「余計なことゆーな！」

急いでリツカの口を右手でふさぐ。

リツカがコクコクと首を縦に振るのを確認して、手を離す。

「はあ……。さっさと行くぞ、ったく……」

まったく、今日一日で何回ため息をついたことか。

これでは本当に幸せが逃げそうだ……。と、思った瞬間。

うつむき気味だったキリヤの目の端に、白い足が写った。

当然だが白いハイソックスや黒いスカートの端が見えるので女生徒だろう。

その位置や足の向きの、故意に立ち塞がっているようだ。

鬱陶しげに顔をあげたキリヤの目の前には、風紀委員副会長、アニエスが立っていた。

予想外の人間の登場に、目を丸くする。

後ろではリツカが息を飲んでいる。

今のアニエスの表情は、まるで仇敵に会いに来たような、険しい顔になっていた。

「九瀧キリヤ。あなたに少々の同行を要請します」

「は……？ 俺、何かしましたっけ……？」

なんだか少し言語がオカシイのは感情を抑えるのに必死なせいか。

周囲の生徒は、何事かと遠目にこちらを伺っている。

「いや、いきなり不躰に申し訳ない。しかし、この娘^こがどうしてもと聞かなくてね」

突然アニエスの後方からテノール調の男の声が聞こえてきた。

音も無く現れた男は、180は超えていそうな長身、緑がかった金髪^髪の似合う甘いマスクは、さぞ女子に人気だろう。

その、身長^{身長}のわりに瘦身の男は、まるでアニエスの保護者のようなことを言う。

「グルーディア会長。いい加減私を子供扱いするのはやめてください。あと、腕章はいつも付けていてくださいますか」

硬い表情のままアニエスが指摘する。

この優男が、風紀委員長なのか。
失礼だが、とてもそうは見えなかった。

どう見ても、アニエスの方が向いている。

「やや、こりや失敬。……でもあの腕章何かヤなんだよねえ。無駄にみんなを威圧しちゃうしさ」

マイペースな話し方には、空気を弛緩させる不思議な響きがあった。
アニエスも、諦めたようにため息を吐く。

「それで、何か俺にようなんですか？」

改めてキリヤが問う。

今度もグルーディア会長が答えた。

「うんうん。今朝この娘が君に失礼なことしちゃったでしょ？ だから謝りたいんだって」

「へ？」

「誤解しないでください。会長に言われてしょうがなく。です」

アニエスの顔には苦渋くしゅうが浮かんでいる。本当に仕様がなく。なのだろう。

とにかく、ここではいろまらずそうだ。

「悪いけどリツカ。一人で先行っててくれ」

振り向きながら告げると、リツカは少し迷ったようだが、小さく「うん」と言つと小走りに去っていった。

「悪いねえ。彼女との時間を邪魔しちゃってさ」

特に含みのない顔で、サラッとグルーディアがレイナと同じようなことを言う。

——果たして本当に俺とリツカが付き合ってるように見えるのか？ 自分じゃ釣り合っていないと思うんだが……。

もちろんリツカに自分が、だ。

キリヤは、自分の容姿は中の中、良くて中の上くらいだと思っている。

目にかかる手前のやや長い黒髪に切れ長の目以外には特に特徴のない顔。

パーツ自体は整っているとは思うが、あくまで崩れていないだけだ。と思っている。

浅黒い肌は東洋の血が強いことを示している。

身長も平均的。筋肉は平均以上の自信はあるが、キリヤにとっては容姿のプラス材料になっていない。

それに比べてリツカは、中学時代ファンクラブが出来る程のルックス。

キリヤの性格では、釣り合っていないと考えても仕方がなかった。

それで卑屈になったり思い悩むようなやわな性根ではないが。

これが、自分を客観的に人間観察したキリヤの結論だった。

もっとも、そもそもその手の話題にあまり興味がないのが本当だった。

だからリツカの隣にいることに劣等感を感じたことはないし、アニエスやグルーディアに対して視覚的に気遅れることもなかった。

天ノ女会長は別格だが、それでも外面という意味では他生徒よりも気圧されていなかった。

その態度を不遜ふそんと取るか雄大と取るかは微妙なところだが。

「じゃ、場所を変えようか」

グルーディアに続いてアニエスも動き出す。

キリヤは後を追いつながら、あまり意味のない質問をした。

「どこに行くんですか？」

そのあまり意味が無い。意味が無かったはずの質問の答えはニコリと、みようによつては人の悪い笑顔のグルーディアによつてもたらされた。

「ふふふ、これから行くのはね、僕らの“ホームグラウンド”さ」

逃げ出したくなった。

嵐の前の静けさ

本来、風紀委員会本部に一般生徒が足を踏み入れることはない。

第一に限らず、魔術か武技を多少でも教育課程に含む高校に於いて風紀委員会という組織は、ある種の独立国家のような扱いとなる。

風紀委員の役員に求められるのは治を維持しえるだけの武力と、中立的な平等さ。

そして、中立的な平等さを維持するためには、他勢力からの干渉を拒絶しつつ介入できる関係を保つ必要がある。

不干渉と要介入という矛盾した性質を持つ風紀委員は、自然とその性質を独善的に変化しやすい。

その点で言えば第一の風紀委員会は性質を歪めることなく職務を全うしていると言える。

ただ、中立的な平等さについて言えば、やや問題のある感が否めなかった。

何故なら、第一の風紀委員会メンバーは、西洋系人で固められているのだから。

大きな木製の扉は、他の教室の戸とは一線を画していた。

普通教室が安い引き戸なのに対し、この扉は木目のしっかりした厚みのある木製の開き戸だ。

丁度目線あたりの高さには達筆な手書きで【風紀委員会本部】と書かれている。

「たっだいま」

莊蔵、と言っても過言ではなさそうなその扉を、グルーディアはまるで自宅に帰ってきたような軽いノリで開いた。

「失礼します」

こちらは無言で入っていったアニエスの後に続き、形式的にノックと一礼をしてキリヤも足を踏み入れた。

本部内には誰もおらず閑散としている。

左右に長机と椅子が置かれ、正面には大きな木製の机と黒皮の椅子。そこだけ異常に書類が積まれているのは、この会長の怠惰な性格を表してか。

「さて、と。先^まずは自己紹介からだね」

余計な前置きはナシ。ということなのだろう。

意味をくみ取りキリヤが頷く。

満足げに頷くグルーディアと、仏頂面のアニエス。

「今更だが初めまして。僕が第一の風紀委員会会長、グルーディア・グラッセルだ。親しいものにはグードって呼ばれてる。ま、好きに呼んでくれ」

「……同じく副会長のアニエス・R・ユーフィリア^{ルイ}です。親しいものにはアニーと呼ばれてますがあなたに呼ばれることは拒否します」
なら教えなければいいのに。とキリヤは思う。

グルーディアも流石に苦笑している。

（グラッセル？ 聞いたこと無いな、無階級家なのか？ ……しつかし、アニエス副会長は【ユーフィリア家】か。そりゃ東洋系人を毛嫌いするのも納得だ。）

ユーフィリア家は西洋の格式高き貴族のファミリーネーム。

西洋ではその家の歴史によって十一階級（半数アルカナ）が付けられている。

ユーフィリアは第七アルカナ、戦^{バンツァー}車^{カー}の名を持つ。

特徴は圧倒的攻撃性と殲滅力、そして頑強さを持つ魔術形式を得意としている。

階級というのは形式的な言い方であり数字の高さが位の高さを表すのではない。

その家独自の特殊魔法によって大アルカナと呼ばれるタロットカードの種類の半数（大アルカナの数は二十二）を当てはめた数字とな

る。

あの大剣を一撃で粉碎した魔法はこの戦車バンツァーの名を持つ特殊魔法【ユニポール・カーネイジ】の縮小版だったようだ。

「で、君の名前は？ ……一応アニーからは聴いてるけどさ」

「あ、ああ。すみません。——今年度新入生の九瀧くたつキリヤです。クラスはG組です」

「丁寧にクラスまでご苦労さん」

自分でも気づかず考え込んでいたようだ。

つい特に必要ないことまで言ってしまったが、別に問題はなかつた。

「さてとお、やっと本題だね。ほら、アニー」

人の悪い笑でアニエスの背中を押す。

「うっ……………ゴメンナサイ」

ボソリとアニエスが謝罪した。

その声はものすごく小さくてほとんど聞こえなかったが、それでも顔を真っ赤にして羞恥に耐えているアニエスを見ると自分が何か悪いことをしている気分になる。

だが、そんな態度は、生来Sっ気のあるキリヤの嗜虐心をくすぐる効果しかなかった。

「えーと…………？ 申し訳ありませんよく聞こえなかったんですが…

…」

本性をカケラも表に出さずキリヤが囁く。

飄々とした態度に意地の悪いことをされている、というのが理解できたのだらう。

アニエスは軽く下唇を噛むが、グードは気づいていないのかわざとなのか、アニエスを促してくる。

「……………先程は、失礼なことをして、申し訳ありませんでした…

…」

「おー、よく言えました」

グードの茶化しにアニエスがキレた。

「……………フツ……………この私に……………こんな恥辱を感じさせるとは、ねッ！

！

——怒りの矛先はキリヤだったか。

「ちょ！？　なんで俺に——！！？」

「——【ファルコレープ】！！！」

発動予備時間をほとんど無視した速度でアニエスの腕に浮かんだ魔術式の魔法が発動する。

腕を突き出す操作と同時に超高速で打ち出されたハヤブサを象った音弾丸が、キリヤの体を吹き飛ばす——　寸前でグードによって魔法が破壊された。

早業、なんてものではなかった。

魔術の起動から発動までの時間はおよそ零コンマ五秒掛かったかどうか。

ファルコレープ自体が音、つまり空気の振動を利用した音速攻撃（一種の比喻であり実際は音の速度には及ばない）魔法であり、発動から対象に効果を与えるまでのインターバルがほとんど無い。

それを的確に、尚且つ一瞬で破壊するとは、風紀委員会会長の肩書きは伊達では無い、ということか。

「いやあー危なかった。ここで“私闘”なんてされたら風紀委員の名落ちもいいとこだったよ」

恐らくファルコレープと正反対の振動波をぶつけることで相殺するというスゴワザを、更に早業で打ち出した本人は、しかし判然としないのつたりとした態度のままだった。

怒るでもなく、焦るでもなく、落ち着くでもなく、気取るでもなく、ただゆつたりと事実を述べているだけ。

その態度に、キリヤは僅かに畏れを感じた。

ことここに来て、この男が掴みどころがないのではなく、存在を曖昧にぼやかしているのだと気付いた。

一体どうなっているのか、この男は理解しようと、観察しようとすればするほど解らなくなる。

だが、その曖昧さは、またも一瞬にして拭いさられた。

逆に今度はしつかりとした、曖昧さのないただの自堕落じだろくそうな風紀委員会会長に戻っていた。

（予想以上に面倒な人だな……。この学校は敵にしたいくない人ばかりだ）

心の奥で、ため息を吐く。

あくまで心の奥で、なので表には出さなかったが。

「というか……今のつて結構危なかったですよね？」

主にキリヤの命とアニエスの立場が。

グルーディアにも副音声が聞こえたのか、苦笑いをしていた（苦味の成分が強すぎた気がするが）。

「……………その、ごめんなさい……。会長も、ありがとうございました」

どうやら、謝るところの分別はついたようだ。

先ほどとは違い真に誠意のこもった謝罪。

この副会長は、基本的には優秀な“風紀委員”なのだろう。

感情の起伏が激しすぎるのと、それを制御できない幼さが無ければ、結構致命傷な気もするが、そこはお愛嬌。愛すべき欠点ということにしておこう。

「まあなんだ。色々あったけどさ、今は教室に向かうのが優先されるべき事項だね？ キリヤ君」

「え……？ あっ！」

室内の掛け時計が指す時刻は九時四十分。

ホームルームが九時四十五分からなので、かなり急がなければならぬ。

「しっ、失礼しますッ！！」

やや礼儀に欠ける動作で頭を下げると、勢い良く背後の扉を開ける。駿馬の如き速さで駆けるキリヤの背後から

「行けーキリヤ君！ 韋駄天のごとく！」

とグードの声援。

「こらっ廊下は走らないで……って会長なに言ってるんですかッ！」

とアニエスの叫び。

この場合立場が上のグードの言葉を優先すべきだろう。
大義名分ができたことで、キリヤは一層足を速めた。

携帯端末に自動送信されていた校内案内図を見ながら走り続け、1
- Gの前についたのは、ホームルームの時間の一分前だった。

校舎内は予想外に広く、自分でもよく時間に間に合ったと感心していた。

教室に入り指定の席を探す。

数秒後、窓側から三列目の前から四番目の席に九瀧の字が浮かんでいるのを見つけた。

マーカー魔法は対象者本人にのみ（正確には教師に配られたクラスカードの名前と一致している席のみ）が見ることができるので、前後左右の生徒の名前はわからない。

さらに言えばこの席順は五十音順ではなく機械によってアトランダムに選ばれているので、苗字が似ているもの同士が近い、ということとはほとんど無い。

たとえ五十音順でもキリヤと苗字の似ているものと近くになることはなかっただろうが。

そもそもが九瀧などという変わった名前のせいで、十六年間似た苗字と出会うなんてことは起きなかったし、別に起きて欲しいとも思わなかった。

キリヤが席に着くと同時に教師が教室に入ってきた。

男子生徒の間からおおっ、と歓声が上がった。

艶のある黒髪を後ろで結い上げたその若い女性教員は、体つきが思春期の男子には大変ヨロシクない造形をしていた。

挑発的でグラマーなその体と対照的に、ほっそりとした白く華奢な首筋や結い上げた髪から覗くうなじは清楚な色気で、そのアンバランスさが逆に扇情的だった。

服装は在り来りなタイトスカートにスーツなのだが、それでも隠しきれない色気を醸し出している。

「皆さん初めまして。桐島ユウカと申します。これから一年あなたの担任を任せられます」

生真面目そうな顔を作ってユウカが自己紹介をする。

教室を見回していたその視線がキリヤのところで一瞬止まる。

気のせいかもしれない、と思うほど短い時間だったが、確かに目があった。

そんなことでいちいちドギマギするような可愛げはキリヤは持ち合わせていないが、やはり気になるものは気になる。（もちろん男女の仲的な意味ではなく、だ。）

「では質問などは後にして、先に“メイトタグ”を配ります」

メイトタグ、とは魔技専系の高校で配布している生徒証明書の代替品だ。

軍のドッグタグよりも一回り大きいそれは、生徒の氏名、クラス、所属団体（部活や委員会）、そして魔術師としてのランクが表記されている。

出席番号1番から順にタグを受け取っていく。

前の生徒が戻ってくるのとすれ違って、キリヤも教壇の前へ。

そこで、タグを渡される時に熱い視線と丁寧なギョツと両手で包むように手渡されたのは、決して勘違いや思い上がりではなかったと思う。

やはり疑問に思っただけ首を傾げながら席に戻る。

もしかどこかで会ったことが……？　と思ひ頭の中のメモリーを漁っていると、前の席から驚きの声をぶつけられた。

「おおすげえ。G組でディスプレイペンターかよ！」

幸いに教室全体が既に騒がしかったおかげで他生徒に聞かれることはなかったが、それでもキリヤは少し肝を冷やした。

「あ、悪い、つい興奮しちゃって……俺は鉄ガジマだ。お前は？」

「いや、いいよ。俺は九瀧キリヤだ。……しかし変わった名前だな」

「お前も相当なもんだけどな」

ハッハッハッ、とガジマが鍛え上げられた体躯によく似合う快活な笑い方をした。

ガジマの言った“デイスペンター”というのは、魔術師ランクの位のひとつだ。

ランクに依る位は5つ。

落ちこぼれのプッター、平均的なノーブル、上級者のハイトライブ、天賦の才持ちのデイスペンター、そして、天上の存在であるオーバリスト。

大まかに分けると魔術を扱うものはこの枠で括られる。

実際は落ちこぼれ^{プッター}は魔術がうまく制御できないものに嘲りを込めて付けられる蔑称となっているが、今は関係のない話だ。

その中でキリヤは才に左右されるレベルのデイスペンター、ガジマはハイトライブなのだそうだ。

G組は武技専攻のクラスのため、ノーブルが当たり前、ハイトライブならば上々といったところだ。

故にデイスペンターのキリヤは相当希少な例である。

それが珍しい、で済めばいいのだが……。

「ま、確かに僻み^{ひが}や妬み嫉みの類は或^{ある}だろうな」

「ああ。だから、あまり知られたくないんだ」

平穩無事に卒業するのが目標のキリヤとしては、あまり波風は立たせたくはない。

入学式前の出来事を考えればもう手遅れかもしれないが。

「ところでさ、ガジマは“混血系”なのか？」

キリヤの声は少し気遣うような色を帯びていた。

浅黒い肌は東洋、エメラルドグリーンの瞳は西洋の特徴を持つ少年は、その問いに「応！」と威勢よく答えた。

東西の戦争が集結した直後あたりに確認され始めた混血系人は、実際は東洋や西洋と同じくらいの長い歴史を持つ系統種族である。

純東洋と純西洋の血をその身に宿す彼女らの特徴は、その特殊

な魔術形態にある。

現在の魔法技術の中に「カートリッジストック」というものがある。拳銃の弾倉をカスタマイズしたような形状のカートリッジと呼ばれる機械に魔法をストックし、魔術の発動予備時間（主に精神集中や座標指定、術式形成などの総称）を省略して魔法を発動できるようにする技術。

SIMトリガーと違い一回使用すれば再充填しない限り使えない欠点を持つが、複数所持することで複数の魔法を同時、多重、連発で打ち出すことが出来る利点も持つ。

その技術の元となったモノが混血系の間で伝統的に受け継がれた「キャストタトゥー」なる術式だ。

体に直接紋章を刻み込むことで術式や魔術陣などの形成を省略する特殊な魔術である。

他にも多数の特殊な混血独自の魔術があるが、それが表舞台に出るまでには途方もない時間が掛かった。

主な要因は混血人たちがむしろ自分たちに対して強い差別意識を持っていたことだ。

決して表で生きず、裏の舞台で影のように生きてきた混血人たちは、今も強い差別意識によってあまり社会に馴染まない傾向にある。

その観点では、ガジマの反応は稀有な例だった。

「つかキリヤも名前だけ見たら混血っぽいよな」

ハハハッ、とガジマがあっけらかんと笑う。本当に珍しい。

お互いに既に呼び捨てなのは、ガジマの友好的な雰囲気に吞まれてだ。

基本あまり踏み込んでいかないキリヤがいきなり呼び捨てで呼べるほど、よく言えば話しやすい（悪く言えば軽い）男だった。

ただその軽さは、決して軽薄そうというものでは無かった。

逆に、まわりの重みを背負って無理やり軽くする。そんな印象を受けた。

「皆さん静かに。——何かこの学校やクラスについて質問などは

ありますか？」

ようやく全員にタグが配り終わって、桐島が質疑応答に移る。

一斉に男子陣が勢い良く手を挙げた。

その様子を、幾分白さがうかがえる半眼で桐島が眺める。

「……先に言っておきますが、私のプライベートについての質問には黙秘権を行使しますからね」

うっ！ とアホども（男子）が手を下ろす。数人上がっていた女子の手も何故か下がっていたが。

全員が手を下げたのを確認して、キリヤが手を挙げた。

「あら、じゃあ、キリヤ君」

下の名で呼ばれたことは意識しないようにして、キリヤは朝の一件から思っていた疑問を口にした。

「なぜ当校の風紀委員会と生徒会は仲が悪いのですか？」

クラスに、朝の一件を知っている者の確かに、という空気と知らない者のなにそれ？ という空気が半々くらいで流れた。

桐島は数回目を瞬かせてから、やや事務的な声をだした。

「それは、風紀委員は西洋人、生徒会は東洋人で固められているからよ」

教室内がざわついた。

ただ一人質問した本人だけは得心した、とスッキリした顔をしていたが。

「な、なんでそんなことすんだ？」

ガジマが後ろを向いて問うてくる。

これは個人的な見解だけど、と前置きしてキリヤが説明し出した。

「要するに、闘争心や反抗意識を抑制するための処置だと思う」

「でもよ、そんなあからさまに固めたらむしろ面白くねえと思う奴の方が多くないか？」

「ま、ガジマの考えが一般的だよな。でも、ここまで徹底してればその限りじゃないんだ。例えばさ、風紀や生徒会が東西混合だった場合、東洋人と西洋人の生徒が争ったら、どうなると思う？」

「そりゃ、止めに入るだろ。特に風紀はそれが仕事なんだから」

「そう。んで問題は、風紀のメンバーに西洋系が多かった場合、そちらが優位な判定をされることがある。……これは俺の意見じゃなくてきちんとした統計があるからな」

「で、でもそれじゃ今は西洋のやりたい放題じゃねえか！」

ガジマが声を荒らげる。どうやら軽いくせに熱い男のようだ。

「ところがこの学校は生徒会が全員東洋人だ。その意味、わかるか？」

「えーと、不正が働きそうになったら生徒会が出張ってくる……？」
自信なさげな答えに苦笑する。

「言葉選びが悪いけど正解。それに、この制度の利点はそれだけじゃない」

「ま、マジか？　どんな？」

「ある物事を決める度に風紀と生徒会が決闘することで、生徒の闘争心やらを発散させるんだ。試合とかでも代表戦で決定するときは自分たちの代表、つまりトップが負けりや納得するしかないだろ？　もっとも優れてるから代表になってるわけだし」

一種の代償行為だよ、と言ってキリヤの説明は終了した。

しかし、ガジマにはまだ納得できないことがあるようだ。つた。

「でもさあ、それでもやっぱり反抗する奴はいるんじゃないか？」

今の体制に納得いかないとかで学生運動じみたことする奴とかさ」

ガジマは自分の疑問におもったことはスッキリさせたい性質らしい。
「それこそ風紀委員会の出番だろ？　相手の意見が正しければ生徒会だって無下にはしないだろうしな」

あの会長はその手の騒動を望んでいる節がある気がする。

ほんの短い時間しか接していないキリヤの中で天ノ女会長のイメージはお祭り騒ぎが好きな人となっていた。

「なるほど！」

突然隣の席から声を掛けられた。

掛けられた、というより思わず声を掛けてしまった。が正しいのか

もしれない。

ガジマと揃って向くと、やっちまった、という顔で頬を掻く少女がいた。

見た瞬間の第一印象はひたすら“^{あか}紅”だった。

真紅のセミロングの髪を後ろで一本に束ねた^{とうがん}橙眼の少女は、自らを^{こうつき}紅月アカネと名乗った。

（つーか、名前まで真っ赤じゃん）

とは思っただけで口にしない。……のはキリヤだけだった。

「はー、そこまで徹底して紅いと逆に感動するな」

「うつ、ちよつと気にしてんだから言わないでよ……」

「ぐッ!？」

最後の呻きはキリヤに脛を^{すね}蹴られたガジマのものだ。

何すんだ、と目で訴えられるが、キリヤは素知らぬ顔で無視した。

「俺は九瀧キリヤ、よろしく」

「俺あガジマ。鉄ガジマだ。系種は混血、よろしく」

「へえ混血！ 私会うのは初めてかも。あ、今更だけど私は東洋の血が強い西洋系だから」

ここが面倒なところなのだが、混血とゝ系の血が強いゝ系は全くの別物だ。

数値にするとわかりやすいのだが、100%を東50西50などで分けられるのが混血。

ゝの血が強い、というのは例えばアカネの場合西洋100に対して東洋が60以上入っている状態、となる。

つまり100%ちよつきりで血の成分が分かれるのが混血（東10西90だったとしてもだ）、MAXが199（200だとちよつきり分かれるから）なのが異系人の血が強い状態となる。

何故こんなことになっているのかは未だに不明らしいが、恐らくこの国の全人口で統計を取れば様々な数値がみられることだろう。

こんな状態なので、基本は強い方の血の特徴が出るとは言え、アカネのような特殊な容姿になることも珍しくない。

ちなみにキリヤの系種は言わずもがな、なので省略。

「つーかアカネ殿はオレらの会話盗み聞いてたのかよ」

声に真剣さはないのでちよつとしたジョークなのだろうが、アカネは大いに慌てた。

「い、いや！ 別に盗み聞きの趣味はないんだよ！？ ただその、九瀧君の話が興味深かったっていうかなんといえますか……ごめんなさい！」

「いや、そんなマジに謝られても……」

ガジマがちよつと引いていた。

確かにこんな風に謝られては弄るに弄れない。

「……許して、くれる？」

おまけにこんな風に上目遣いで心配そうに尋ねられては、普通の男ならば一瞬で許すだろう。

あくまで普通の男なら、だが。

「あ、ああ、もち——」

「ヤダ」

ガジマがあっさり陥落して許そうとしたが、それを遮ってキリヤが断言した。あえて子供っぽく。

流石にアカネも予想外だったようで目をぱちくりさせている。

しかしキリヤの顔が人の悪い笑みを浮かべたのを見て、自分の演技が見破られたと気付いたのだろう。

「……君、性格悪いって言われるでしょ。それもしょっちゅう」

「おや、心外だな、この聖人君子と呼ばれる俺がそんなことイワレルワケナイダロウ？」

「白々しさ全開で棒読みね……」

疲れたようにアカネが呟く。

二人のやりとりに「どういうことだ？」とガジマが首を捻^{ひね}っていた。

「静かに！ とにかくこの件は詳しいことは校長にでも訊いてくだ

さい。……他に質問は？」

どこかの討論会や議会のような空気になりつつあった教室内に流石に黙っていられなかったのか、無理やり（しかも投げやりに）話題を終わらせ再度確認をする。

生徒たちは今の討論の余韻でか他のことを考える事に脳のキャパシティを使えないでいた。

また、桐島と目があった。今度の視線は少しだけ恨めしそうだった――気がする。

「無いようなので本校のカリキュラムの簡単な説明に移りたいと思います。――そこ、静かに。……コホン、まず最初に、本校は得意魔法や武技の熟練度などに応じてクラス分けがされています。このGクラスは強化魔法が扱え、尚且つ武技の修得レベルが高い者たちのクラスです。大雑把に説明すればこの一年間は長を伸ばして短を補う授業となっています。……端的に言えば回復魔法や殲滅魔法は諦めて武技と強化魔法に傾倒しろということです」

随分ざつくばらんに言うんだな。もう少し建前で隠すかと思ったが、どうやらこの教師、無駄な気遣いや遠慮は持ち合わせていないらしい。

その代わり誤魔化しや隠し事も嫌いそうなのは好印象だった。

「具体的な話はまた明日にでも、今日のところはこれで放課とします。――ああそれと」

一礼して教室から去ろうとした桐島が立ち止まり、顔だけを生徒たちに向ける。

「――放課後は速やかに下校することを推奨しますよ。今日は、校内がお祭り騒ぎでしょうから」

それだけ言い残すと、今度こそ教室から出ていった。キリヤはそりゃそうだろうくらいの思いでその言葉を聞いていたが、後にそのことを後悔することになる。

――忠告通りさっさと帰っておけばよかった、と。

嵐の新入部員獲得戦（前編）

ホームルームが終わりガジマ、アカネと無駄話をしながら帰る準備をして、二人と別れリツカのいるB組へと向かった——ところまでは良かったのだが。

「うわあ、すっげ人混み。あの中に突っ込むのは勇氣いるな」

「同性としてはちよつと嫉妬しちゃうけどねえ」

「いや、なぜお前らがいる？」

順にガジマ、アカネ、キリヤのセリフである。

場所はB組の教室前の引き戸。そこに隠れ気味に教室を覗く系種も表情も違う三人組が。

三人の視線の先にはチャラそうな男半数ガリ勉そうな男半数（あくまでキリヤの外見的印象）で形成された人垣。……に囲まれてオロオロするリツカ。

どうやらリツカはちよつと異常なくらい男子の注目を浴びたようだ。それも（本人にとっては）かなり悪い方向に。

現在1―Bの教室にはリツカを囲む男衆と、その様子を複雑な顔で観察している女子の集団がひと組み。

その女子たちも特にリツカを救出する気はないようだ。

「ちよ、あれは流石に不味い空気じゃない？」

アカネの声に男子で出来た人垣に目を戻す。

どうやら誰がリツカと帰るか、で揉めているらしい。当然のようにリツカは放置（当人であるにも関わらずである）されている。

（ふう。仕方ないなあ。あんまり波風は立てたくないんだっつーに）
内心で悪態をつきながら、教室内へ堂々と気後れなど感じさせぬ歩みで入っていく。

「おい、リツカ、さつさと帰るぞ」

教室中の視線が、キリヤに突き刺さる。

それを意識の埒外へと放り投げ、キリヤは更に進む。リツカのすぐ

そばに行くともう一度声を掛ける。

「何してんだ、さっさと行こうぜ？」

あえて教室中に響くように発せられたその声に、

「あ、ああ、うん」

機能停止していたリツカの脳が再起動、ただしまだコクコクと人形のように首を振るので精一杯な感じだった。

とにかく、後ろの大勢の存在を完全に無視して教室の後方から廊下に出ようと歩きだした二人に、やけにチャラそうな声がぶつけられた。

「いやいやいや。ちよつと待てつて、何、何なの？　つか何もんよお前、急に出てきてふざけちゃってんの？　オレらとリツカちゃんは今楽しくオシャベリしてたっしょ？　オメエの目は飾りかよ、ああ！？」

キリヤからすればお前らこそなんなの？　な感じだったしとてつもなくメンドーだったので無視しようかとも考えた、が、明日からのリツカの立場を考えて仕方なく振り返る。

周囲より一歩前に出ている青髪（どう血統を混ぜようと青にはならないはずなので、恐らく染めているのだろう）の男が、二人を引き止めた声の主だと思われる。

だが、後ろの男共の表情から察するに、この男の言葉は満場一致でリツカに集つてたものの内心を代弁していた。

（つかなんだこいつら。寄つて集つてリツカに詰め寄つて、しかも本人ガン無視だし。何より全っ然リツカ楽しそうじゃなかったじゃねーか、てめえらの目こそ節穴だろ）

と心の中で思った。ただではなく口にも出してはつきり言い放った。「いやいや、お前らこそマジで何なの？　頭逝つてんのか？　全っ然楽しそうじゃなかったし。つーかなんだ？　お前らさぁリツカに寄つて集つて、まさかお前ら如きがこいつに釣り合うとでも？　…

…天地がひっくり返つてもねーな、つか鏡で自分の顔見てから出直してこいよ」

男子共の顔が、面白いほど引き攣る。恐怖でも衝撃でもなく怒りでキリヤは基本、厄介事が嫌いだ。面倒ごと^{めんどごと}も嫌いだ。だが、こんな安い男共を敵に回す程度は、厄介とも面倒とも思わ^{おも}ない。

「て、てめえ……！ フツざけてんのかッ！？ ああん！？」

面白いほどテンプレな反応に、思わずキリヤが鼻で笑う。

その行為が決定打となり、ダムが決壊したような勢いで、男たちの感情が爆発した。

「ブツコロス……ッ！！」

最初は、青髪の男だった。

憤激に顔を歪め、大振りのパンチを繰り出す。

その拳をキリヤは僅かに上体をずらした^{かわ}だけで躲す。

リッカが騒ぎに巻き込まれないように壁際に退避したのを視界の端で捉え、目の前の敵に集中する。

無謀な特攻を素気無く躲され、青髪がバランスを崩す。キリヤは青髪の不安定になった体を支える左足の甲を自身の左足で思い切り踏みつける。

そのまま脛同士をかち合わせ、ローキック気味に足を払う。

「な、いつっ！？……つてぶごー！！」

青髪が意味不明な悲鳴を上げながら顔面から地面に倒れる。

受身すら取れずに倒れた青髪の醜態を見て、後に続く者たちが怖じ气ずく。

先駆者がしくじって後続者が成功するのは、相当な実力と運と流れが必要だ。その点において、現在のこの場における空気は続くものにとって最悪であった。

——この人数で負けるとは思わない。だが、最初の五人は確実に痛い目を見る。

この場でキリヤと相対する人間は皆共通でこう考えていた。

そして、その最初の五人になりたくない、とも。

そもそもこの程度の人数でキリヤをなんとかできると考えているこ

と自体が間違いのなのだが、彼らはそんなこと知る由もない。

「次、来ないのか？ 何人同時でもいいぜ？」

大胆不敵にこんなことを言つてのけるキリヤを前に、完全に戦意喪失な男子共。

「へえ、君、かなり強いね。その腰抜け共より遙かに」

突然呆然と状況を見ていた女子集団の中から声を掛けられる。

中心あたりから出てきた少女の顔に、何か既視感を覚える。

その既視感を確信へと至らせられないまま、キリヤは少女と相対する。

「初めまして、のはずだよね。私は中条ハルカ^{なかじょう}。あなたは？」

その純粋な瞳に逡巡する。

ここで名を明かせば明日から闇討ち、待ち伏せなどのオンパレードに遭う可能性がある。

しかし、ここまで純粋に名を尋ねられては、答えないのも悪い気がする。

「俺はキリヤ、よろしく」

キリヤが出した結論は、ある種のその場しのぎだった。

苗字は名乗らず名だけを告げる。特に違和感は無いはずだし、九瀧などと言う変わった苗字では印象に残る恐れがあるが、キリヤならありふれてこそいないが特に変わってもいない。

「そう、キリヤ君、ね。何組か聞いてもいいかな？」

「悪い急ぐから。ほらリツカ、さっさと行くぞ」

都合の悪い質問なので、早々に切り上げて退散することにした。

幸いにも、今度は引き止める声は聞こえなかった。

「いつやー、キリヤが挑発し返した時はどうなるかとヒヤヒヤしたぜ」

楽しそうにガジマがキリヤの肩を叩いてくる。

教室を出たところで二人と合流し、一旦落ち着ける場所にでも、と

いうアカネの提案で現在キリヤたち一行は学内のカフェテリアの一角を陣取っていた。

ちなみに自己紹介はここに来る間に済ませている。

「えーっと、アカちゃんもG組なんだよね？」

「……え？ アカちゃんって私のこと？」

コクンと頷くリツカ。

「まあ確かにアタシはG組だけどさ、……アカちゃんってのは止めてくれないかなあ」

「じゃ、姐さんあねで」

「どういう意味よ！」

キリヤの提案にアカネが噛み付いてくる。

「いや、結構似合ってるぜ、姐さん」

ガジマまで乗ってきたので、アカネは疲れてようにテーブルに垂れた。

「……姐さんってどういう意味？」

乗り切れていないアホが若干一名いた。

この天然さがリツカの売りと言えば売りなのだが、長い付き合いだとツッコミも雑になってくる。というかツッコむのも面倒臭くなってくる。

「あれだ、紅月きんづきはいわゆるヤーさんの娘でな、だから姐さんなんだ」
投げやりに嘘を付く。

それを、リツカは律儀に信じる。

「なるほど、ってヤーさん！？ こ、紅月さんってすごい人だったんだね……?!」

「なんで急に他人行儀な呼び方になってんの！？ というかこんなウソ信じないですよ……」

今度こそ本気で脱力してアカネが頂垂れる。ガジマは「すっげえ天然な」と呟き、キリヤはズズーとジュースをストローで吸う。

「え？ ウソ？ え???」

ただ一人リツカだけが、この空気を作り出したくせに置いてけぼり

をくつていた。

「……とりあえず飲み物も尽きたしさ、帰ろうぜ」

疲れたからと言わないのは一片だけ残っていたキリヤの優しさだった。

それぞれ異口同音に賛成の意を表した三人を引き連れてキリヤが歩き出す。

（つーか、一日でいろいろ起きすぎだ。……平穩無事に生活するつもりだったのに）

一日目にしてキリヤの目標は儚く砕け散った感がある。しかも一概に他人の所為とは言えないのが、また虚しさを倍増させていた。

精算は最初に済ませているのでそのまま出口に向かう。

カフェテリアを出た瞬間、こちらに向かってくる人影が。

その人影にキリヤは気付かないふりをしてスルーしようとして――

「や、偶然だねえ九瀧君」

――声を掛けられた。

「……ホント、偶然であることを望みますよ、天ノ女会長^{あまのめ}」

キリヤ以外の三人は突然現れた大人物に目を円くしている。

ニコニコと（見ようによつてはニヤニヤと）笑いかけてくる会長に
^{へきえき}辟易する。

正直な話、この人とは出来るだけ離れた空間で生活したいというのがキリヤの本心だった。

「どうやらつつが無く友好関係を築けているようだね。――あと私のことは友愛を込めてレイナと呼び捨てでいいぞ」

「おかげさまで。……折角ですが遠慮しておきますよ。天ノ女生徒会長」

滅相もない、という顔で大仰に拒否してみる。

キリヤの反応には少しも残念そうにせず、レイナの視線が後ろの三人に注がれる。

「君たちは彼のクラスメイトかい？ ああ、君には既に会っていたね、立花リツカ、といったかな」

「は、ハイ！ ご無沙汰しております！」

「いや、朝出会ったばかりだから」

「私は紅月アカネです。クラスは九瀧君と同じGデス」

「自分は鉄ガジマくろがね、系種は混血です！ クラスは前に同じです」

「ふむ、私はご存じ天ノ女レイナ、天ノ女家の長女にしてこの第一の生徒会長だ。よろしく」

会長の挨拶は余計な自信が溢れていた。

「ところで会長、今は忙しいではありませんか？」

キリヤの、遠回しなさつさとどっか行け的質問にも、気付いているだろうに副音声は無視して返答する。

「ははは、実は副会長二人に仕事を押し付けてきたところさー！」

……意外にダメな会長だった。この人の下で働くすべての人に合掌。……つと、そろそろ始めるな。では新入生諸君、ボロ雑巾になりたくなければさつさと帰宅したまえよー」

突然颯爽さっそうと会長が走り出した。やけに走り去るその姿が様になっていて、ボーゼンと見送っていた、その瞬間。

ピンポンパンポーン、とひと昔古いアナウンスコールのような音が聞こえてきた。

『あーあーマイクテス、テス。——校内に残っている新入生諸君！そして部活に入っている2、3年の野郎ども、今年も新入部員争奪戦の時期がやってきたぜー！』

な、なんだ！？ と狼狽しているキリヤたち。その後方からYEAH！ と歓喜の声が聞こえてきた。

振り返った先には、目をギラつかせた上級生たち。

屈強そうな男たちの集団がこちらを向く。その目は獲物を見つけたハンターのそれだ。

「君たち新入生だろう！？ どうだい我らレスリング部に入らないか！？ おお、君なんかいいじゃないか！ その180ありそうな身長、鍛え上げられた肉体！ 素晴らしい！ エクセレントだ！ というわけで入らないか？ 入るだろう？ 入るよな！」

「……逃げっぞキリヤ以下二人！」

「お、おう！」

「おっけー！」

「え？ え？ いいのー！？」

熱心に勧誘（脅し？）されていたガジマの言葉を皮切りに四人は走り出す。

どうやら先程のような勧誘がそこかしこで起きているようで、時々新入生と思われる悲鳴（何をされているのかは知りたくもない）や上級生の威勢のいい声が響いている。

（くっそ、桐島教諭が言ってたのはこういうことか！ てかなんでキチンと説明してくれなかったんだよ！）

今更こんなことを考えても後の祭りだが、今は桐島の説明不足（恐らくわざと）を恨む。

「たぶん玄関ホールはまっ先に待ち伏せがいるだろうから一旦教室にでも行くぞ」

反対するものはいない。というよりそんな余裕が無いだけである。

四人はそのままカフェテリアに向かった時の道を引き返していった。

「こ、ここまで来たら流石に居ないわね」

道中五回ほど捕まりそうになったが、そこは（リツカ以外）全員G組ということもありなんとか逃げ切った。

「こりゃ、ある意味戦争だなあ、捕まったらほぼ確実に入部させられそうだな」

「同感だ。……さっき魔術でブッ飛ばされてる一年を見たんだが、いいのかあれ？」

「……………ゲホッ」

若干一名喋る余裕のないものが、小さく咳き込むことで存在をアピールしていた。

「……ダイジョブ？ B組のリツカちゃんにはちょっとあのスピー

ドは辛かったかあ」

アカネがリッ力を気遣って背中をさすっている。だが、その表情は隠しても隠しきれない喜びが浮かんでいる。

「ずいぶん楽しそうだな？」

「あつはつは、いやー何かこういうのってお祭りっぽくて楽しくない？」

何故こうも第一の女子はお祭り騒ぎが好きなのだろうか、サンプルは三人中二人と少ないが。

「てかこれからどうするよ？ この様子じゃ下手すりゃ下校時刻ギリギリまで、つてもありえるぜ」

「……本当にありえそうで怖いな。——こうなりゃ仕様がな、な」「え？ 何か妙案でもあんのか？」

ガジマが驚いたように立ち上がったキリヤを見上げる。

「ああ、その名も【モビリティ作戦】——要するに、強行突破、だ」にやりと不敵に笑うキリヤに対しての反応は、

「やっぱそうなるんだ……」

「……君って意外に血の気多いよね」

「ふはは、楽しくなってきたじゃん」

順にリツカ（諦め）、アカネ（苦笑）、ガジマ（ノリノリ）である。しかし誰一人として反対するものは、いない。

「じゃ、決まりで。——【モビリティ作戦】成功させるぞ！」

「……おおー！！」「」

なんだかんだでお祭り好きな学生四人であった。

【モビリティ作戦】の概要は単純明快、ガジマが突っ込み、アカネが攪乱し、キリヤが仕留める。

唯一格闘の苦手なリツカは後ろで待機、状況によってサポートと決まった。

隊列はガジマが先頭、アカネとキリヤがその後ろに並んで、しんがり殿はリ

ツカ。

ルートは一年生の教室から一階へ、その後は出来るだけ戦闘を避けながら玄関ホールを経由して外に出て、後はひたすら走るのみ。

「……改めて考えるとやはり作戦ですらないな」

「まったくだ」

提案者が無責任に言い放つ。

「じゃ、行きますか」

ガジマを先頭に走り出す。

廊下には人影はない、そのまま階段を駆け降りる。

踊り場にも一切人はいない。そのまま一階廊下を駆ける、とそこでようやく部活勧誘の一団と遭遇。

「……！ 君たち！ 是非我がレスリング部に――」

「てつめえらはもういいってのお！！」

最後まで言わずガジマがレスリング部の勧誘（2回目）をショルダータックルで吹っ飛ばす。

「ぐっはあ！！？」

「お、お前たち！ 掛かれ！ こうなりや強制入部だ！」

レスリング部の対応も早かった。吹っ飛んだ部員には目もくれずガジマに3人がかりで飛びかかる。

後方に残った4人はキリヤたちの動きを牽制しようとして、一人足りないことに気が付いた。

「とーう！」

「ぐあ！？」

突然後ろから後頭部を蹴られて部員の一人が顔面から地面にダイブする。

いつの間にか後ろに回っていたアカネの不意打ちに、残る部員3人の注意が一斉に集まる。

「――後ろへの注意がお粗末ですよ、っと」

その隙に音も無く移動したキリヤが3人の後頭部を次々に強打して気絶させる。

手際のいい攻撃にアカネが感心していると、

「——【グラップル】アアア！」

ガジマの叫ぶような技名に続いて三連続で壁に何か強打したような音が響く。

目を向けると、完全に伸びた3人のレスリング部員に囲まれるように肩で息をするガジマの姿。

「一人でやるとはスゴいな」

素直に褒めるキリヤと

「アンタは見た目に違わ^{たが}ず雑な戦い方ねえ」
皮肉るアカネ。

「ウッセ、この先輩方があまりに本気で潰しに来るから思わず全力でぶっ飛ばしちまったよ」

「まあ大丈夫だろう。この程度で大怪我するような鍛え方じゃレスリング部なんて務まらないだろうし」

苦い顔をするガジマを簡単に慰め、また走り出す。

どうやら他には勧誘員たちは居なかったようで案外あっさりと玄関ホールへ。

ホールに続くドアを開いた瞬間——

「セイヤアー！」

「うおっ!？」

咄嗟にガジマが転がるように回避する。

甲高い金属音が鳴り響き、ホールの扉がズル、と斜めにズレて上部が床に落ちる。

啞然とする4人。

「フ、またつまらぬものを」

「——【ワイルドバーン】」

なにやら危険なワードを口走ろうとした刀を携えた男子生徒を、アカネが燃えるように赤い光を灯した右足で蹴り飛ばす。

「ふー、危なかった。危うく版權物のセリフを言われるところだった」

「いや、お前のセリフが一番危ないから」

「漫才やってる場合じゃねーぞ!？」

見れば、ホールには少なくとも五組みの勧誘をしている部員がいる。その上キリヤたちの他に新人生の姿はなく、先程的一幕で全員の目がこちらを完璧に疑いようないほど捉えている。

「どうする？」とアカネ。

「どうすつか……」とガジマ。

「吹っ飛ばすか」とキリヤ。

「うん、吹っ飛ばすしかないね」とリツカ。

後半二人の過激な発言に前半の二人が目丸くする。

そのまま固まる二人を置いて、リツカが前に出る。同時に勧誘員たちも一斉にこっちへ走って向かってくる。

なかなかの迫力でもって迫ってくる人の塊に臆した様子もなくリツカは右手を前に突き出す。

「スウ、——【プラズマウェーブ】！」

凜と響く声で唱えると同時に、リツカが突き出していた手のひらを握る。

浮かび上がったのは直径がリツカの身長（163?）程もある巨大な魔術陣。

魔術陣の中心に凝縮されたプラズマが現れ、放射状に爆散した。

一瞬の強い光の後、緑色の巨大な光の波が^{ウェーブ}勧誘員たちに迫り、ボロ雑巾のように二十数名の人間を吹っ飛ばした。

「うわぁ……」

アカネがひいていた、と同時に感動もしているようで微妙に引きつった顔になっている。

張り詰めていた緊張の糸が切れたようにリツカが脱力する。正直な話キリヤも今の魔術には驚いていたのだが、今は先に^{いなか}功労者を労おう。——としたその手が止まる。

「——今の喰らって意識あるとかバケモンかよ……」

「あんな魔法をあの一瞬で構成するほうがバケモノだと思うがね？」

キリヤの視線の先、死屍累々ししるいゑいな人で出来た山の上に腰を下ろす優男風な男が、素直な賞賛を込めて皮肉る。

真ん中分けの金髪に縁のないメガネをかけた男の外見には一切の乱れが見当たらない。

「……前言撤回だ。あの魔法を完璧かんぺきに防はぐなんてやっぱアンタ、バケモンだよ」

ガジマたちからすればどちらもバケモノクラスである。

「ふふ、それにしても、こんなに興奮したのは久しぶりだねえ。こんな“逸材”そうは居ないよ」

いきなり優男が怪しく嗤わらう。メガネが光を反射して怪しさを余計に演出している。

「どうだい！？ 我が『科学的魔術研究会』に入らないか？！ いや、是非入ってくれ！！」

「お断りします」

リツカがバツサリと切り捨てた。

グハッ！ と男がダメージを受けていた。そしてそのまま膝を付く。

「くっ！ さっきの魔法のダメージが……！ 君に少しでも良心があるならここで断るなんてことは」

「お断りします」

再度、切り捨てて。……意外に辛辣だな。

「そうか……。ならば、実行行使だ！」

男は意外に速い速度で迫ってきた。

リツカはもとから身体能力が高くない。その上さっきの上級魔術の反動で体に力が入らずまともに動けない。

「もらったあ！」

「俺の存在忘れんなって」

リツカに手を伸ばす男の腹にキリヤが打ち上げるような上方向蹴りを突き刺す。

丁度つま先が鳩尾に刺さり、男が嘔吐えつく。そのまま足を振り抜き蹴り飛ばす。

「ゲホア！！……が、ガホツ、や、やるじゃないか」

強がってみせるが、体をくの字に曲げて地面に倒れ込んだまま動けない様子だった。

「……帰るか」

「……うん」

「そだね……」

「おう」

どうするか暫し^{しば}考えて、男は放置してさっさと帰宅することに決定。なるだけ周囲の惨状に目を向けないようにしながら玄関ホールを抜ける。

背後で弱々しく「ま、待ちたまえ……」と聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196x/>

THE ACT FOR.....

2011年11月17日19時26分発行